

他者から見た「いい子」の構造

What Constitutes a “Good Child” According to Others.

朝 日 志 帆* 岡 本 吉 生**

Shiho ASAHI

Yoshio OKAMOTO

要 約 所謂「いい子」は、日常生活で子どもを褒める場合に使う言葉である。従来、多くの研究で、「いい子」傾向と精神的健康度との関連が検討されてきた。しかし、従来の研究で定義されてきた「よい子」と日常で「いい子」という言葉で表現される人物像には違いが存在するのではないかと考え、本研究では日常で使用される「いい子」に着目し、「いい子像」の再定義を行った。その結果、他者からの「いい子」の評価には、「よい子」に含まれる従順さや模範的振る舞いだけでなく、他者から見た上下関係における対人葛藤に対する回避性が示唆された。また、友人同士のような同等の関係においては、「いい子」が行う優等生的な振る舞いが対人葛藤を生じさせることも明らかになった。

キーワード：いい子，よい子，対人葛藤

Abstract A “good child” is a term that is routinely used to praise a child. A number of previous studies have examined the relationship between traits of a “good child” and mental health. However, an “exemplary child” as defined in previous studies presumably differs from the term “good child” that people use routinely. The current study focused on the term “good child” as is routinely used. The term has been redefined here as the figure of a “good child.” According to others, a “good child” refers to docility and exemplary behavior (both of which describe an “exemplary child”) as well as avoidance of interpersonal conflict in superior-subordinate relationships. In addition, conformity by a “good child” in an equal relationship like that between friends causes interpersonal conflict.

Key words : Good child, Exemplary child, interpersonal conflict

1. はじめに

「いい子」は、様々な場面で使用される言葉である。子どもを褒める場面もあれば、「いい子ちゃん」のように揶揄する場面もあり、前後の文脈によって「いい子」の意味が異なる。従来の研究では、協調性や順応性が高く他者に素直に従う子どもが「いい子」とされ、自尊感情や精神的健康度との関連が検討されてきた。

豊田（2010）は、自尊感情とエゴグラムにおける順応した子ども（AC (adapted child)）尺度の得点の関係について、自尊感情が高い場合に AC 傾向が低くなり、自尊感情が低い場合に AC 傾向が高くなると指摘している。また大学生の自己評価や対人関係についての語りの逐語録と精神的健康度との関連について、精神的に健康でない大学生群は自己評価が低く、親子関係において親に反抗しない等の「いい子」であるとも報告されている（朝日・岡本, 2018）。

このような「いい子」傾向は、親子関係からの影響を受けていることも考えられる。市毛・大河原（2009）は、「親、もしくは他者から見て『よい子』であってほしいという望み」を、「よい子願望」と名付け、児童期に親からのよい子願望を受けたと感じ

* 家政学研究科 児童学専攻
Graduate School of Home Economics, Division of Child Studies

** 児童学科
Child Studies

ている青年は、「何らかの外的な基準上で高いパフォーマンスを行い他者からよい評価を得るということが、自己価値の感覚においても重要な地位を占めている」と指摘している。「いい子」でいようとするのは「いい子」自身の単純な感情ではなく、本人の成育歴や自尊感情、精神的健康度が複雑に作用し合っている。

ここで、本研究で「いい子」という言葉を使用する意図を説明する。多くの研究では「よい子」と表記され、「よい子像」が定義されてきた。しかし、筆者は、従来の研究で定義されてきた「よい子像」と、日常生活で私たちが使用する「いい子」という言葉が示す人物像に違いがあるのではないかと考えた。「いい子」という発音は日常生活で使用する発音と同じであり、質的調査から得られた微妙なニュアンスをより正確に分析するためには、調査や論文でも「いい子」と表記する必要があると考えた。また、「よい子」は、漢字では「良い子」「好い子」「善い子」と漢字で表記される。デジタル大辞泉によると、「良い」「好い」は「人の行動・性質や物事の状態などが水準を越えているさま。」とされ、「良い」「善い」と書く場合は、「人の行動・性質や物事の状態などが、当否の面で適切・適当な水準に達しているさま」とされている。このことから「よい子」の「良い・好い・善い」という漢字から善悪を想定させ、道徳的・人間的価値のある人物を連想させる可能性がある。本研究では「いい子」を、善悪や優劣ではなく一つの特徴として捉えているため、「いい子」という言葉を使用することが望ましいと判断した。

2. 方法

(1) 調査対象者

調査対象者は都内の大学院に通う女子大学院生7名である。

(2) フォーカス・グループ・ディスカッション

フォーカス・グループ・ディスカッションは、参加者同士の相互作用を利用するグループ面接である。長所として、研究参加者が相互の発言に回答しコメントするよう動かせることが挙げられ、また、1対1の面接よりも人工的でない設定ができることから、生成されるデータにより高い妥当性があるとされる(C.ウィリッグ, 2003)。

本研究では、回答者自身の意見や回答者自身が体

験した具体的なエピソードに加え、話し合いの途中で他の回答者の意見を聞いて思い付いたことなど、1対1のインタビュー調査では得られない「いい子」に対する多面的な意見を収集するため、フォーカス・グループ・ディスカッションを用いた。

(3) 手続き

筆者と回答者7名の計8名が中央のテーブルを囲んで円になって座り、お互いの表情が見えるようにした。映像の記録用に、使用する部屋の天井に設置してあるビデオカメラを使用した。また、録画と同時に録音も行った。

回答者が集合した後、調査の目的や個人情報の管理の説明を行った。ディスカッションの最中は、回答者自身の意見に加え、他の回答者の意見を聞いて思い付いた別の意見や感想等、自由に発言して良いことを説明した。質問や議題の提示は筆者が行い、ディスカッションの最中には発言する回答者に偏りが出ないように、発言の少ない回答者に対して筆者が質問をすることで発言を促した。

(4) 質問項目

①サザエさんにおける一般的な「いい子像」

「いい子」がどのような人物像であるか連想しやすいよう、アニメを題材にした。数多く存在するアニメの中から題材にするものを選ぶ上で、国民的アニメであり多くの人が知っていること、性別や年齢が多様な人物が登場すること、学校・家庭・放課後の友人関係等異なる環境下における登場人物たちの人間関係の様子が分かることを条件とし、「サザエさん」を選んだ。

「サザエさんに出てくる登場人物の中で、誰がいい子だと思うか。」という質問をし、自由な回答を求めた。議論が滞った場合は、題材にしたアニメの登場人物の言動を筆者から例として提示し、議論の活発化を図った。

②現実場面における「いい子像」

現実場面における「いい子像」を明らかにするため、「実際に関わりのある人物の中で『いい子』だと思う人のエピソード」の回答を求めた。議論が滞った場合は、これまでに出了意見に対してどのように思うか、筆者が回答者に意見を促すこととした。

3. 結果

(1) 分析

分析の手順として、まず、録音の逐語録から得られた言葉を、前後の文脈や微妙な意味合いを考慮した上で別の言葉で置き換えコード化し、他の言葉との類似性や相違性を繰り返し検討した。次に、コードをさらにまとめ概念を生成した。

カテゴリーとその定義を Table1 に示す。

Table 1 Categories of a “good child”

カテゴリー	定義
他者評価	ある人物の特性を他者としての第三者的視点から評価すること。
対人関係	ある人物において、他者からの影響を受けた場合や他者へ影響を及ぼす場合等、他者との相互作用の中で出現する特性。
個の特性	生来的特性等、他者の影響を受けずに出現している特性。

(2) サザエさんにおける一般的な「いい子像」

①サザエさんにおける「いい子」についての逐語録

「サザエさんの登場人物の中でいい子は誰だと思うか。」という質問をした結果、挙げられた登場人物名とその理由を述べた逐語録の一部を Table2 に示す。

『浮江さん』は、磯野家の隣に住む伊佐坂家の長女である。容姿端麗であり育ちがいいと周囲に感じさせる振る舞いや、成績優秀でスポーツも得意という模範的な優等生である点が「いい子」とであるとされている。『早川さん・かおりちゃん』は、カツオの同級生で、性格や見た目の良さからカツオが好意を寄せている人物である。同級生の中でも特に、カツオが気に入っている人物としてアニメに登場しているため、「ツートップ」という表現がなされたと考えられる。『中島くん』はカツオの仲の良い同級生であるが、カツオの行動を注意する点が「いい子」と評価された要因であった。『マスオさん』は、サザエさんの夫であり、アニメでは優しい性格が描かれている。上の立場の人物とも良好な関係を保っている点に加え、商社に勤めているという肩書が「いい子」とされる要因である。また、他者に従う特徴に対し、都合がいいという表現がなされた点が特徴的であった。『ワカメちゃん』は、サザエさんとカツオの妹である。本調査ではしっかり者という性格が目目され

た。しかし、一度は「いい子」として名前が挙がったが、妹気質や立ち回りの良さが原因で、将来「いい子」ではなくなるのではないかという議論がなされ、繰り返し検討された。『タラちゃん』は、サザエさんの息子で、3歳でありながら敬語を使う点が「いい子」と評価された。しかし一方で、サザエさんのアニメの時代設定と現代の親子関係の違いも指摘され、周囲に敬語を使うことはサザエさんの描かれた時代ではごく一般的なことだったのではないかと議論された。また、『タラちゃん』は皆に可愛がられ愛される様子も「いい子」の評価の対象となった。

「いい子」という言葉は本来、子どもに対して使用する言葉であるが、本調査で「いい子」として名前が挙げられた登場人物の中には、『浮江さん』のように高校生であり小さな子どもではない人物や、『マスオさん』のように成人した人物も存在する。この二者の場合、回答者は議論の中で登場人物の現在の様子に加え、現在の様子から連想される幼少期や過去の成育歴を含め、「いい子」と評価している。このことから、従順や優等生といったある時点での評価だけでなく、過去の成育歴や将来像との連続性も「いい子」の評価に含まれることが示唆された。

②サザエさんにおける「いい子」についての逐語録のコード化とカテゴリー

逐語録を別の言葉で置き換えコード化し、カテゴリー別に分類したデータの一部を Table3 に示す。

【他者評価】においては、成績優秀で模範的であり、日々の言動や所作も正しくそつがない要素が「いい子」と評価される傾向にある。これは、従来の「いい子」像にも含まれる特徴である。性格に芯があり規範意識を持っている人物像が「しっかり者」と評価され、「しっかり者」と「いい子」の関連が示唆された。更に、商社マンという言葉からは、肩書の良さや頭の良いイメージ、憧れの職業であることなど「いい子」の評価には社会的評価も含まれることが明らかとなった。

【対人関係】においては、規範意識から状況に応じた適切な判断をし、同等の関係の相手に注意をすることで、他者にもルールから逸脱しないよう促すことが「いい子」とであるとされた。これは、上の立場から見た場合、他者にもルールを守るよう指示できる模範的な人物だと映る可能性があることから、模範的な優等生イメージと関連している。また、上

下関係では上の立場の人物に逆らわず従順であることや、相手に従う協調性があることが重視されている。相手に従うことで波風を立てず、良好な人間関係を築くことができる点が「いい子」であるとされた。特に「お義父さんともうまくやってるし。」という語りから、「いい子」には上下関係における葛藤への回避性があることが示唆された。

【個の特性】においては、「育ちがいい」という表現に、家庭環境や本人の性格、立ち振る舞いなど、幅広い意味が含まれていた。裕福であることから物理的にも心理的にも余裕があり、マナーを守り常識があるなど、高い教養のある人物像が連想された。

③サザエさんにおける「いい子」の比較対象「いいやつ」

本調査では、「いい子」としての評価と議論がなされる中で、登場人物に対し「いいやつ」という表現が使用された場面があった。よって、「いい子」の概念をより明確にするための比較対象として、「いいやつ」と表現された人物像についても分析を行った。「いいやつ」と表現された登場人物は、『サザエさん』と『カツオ』であった。

『サザエさん』は物語の主人公であり、アニメでは明るく朗らかな性格が描かれている。好印象な人物ではあるが、優等生や模範生のような特徴には当てはまらないため、「サザエさんはいい子なのだろうか」という議論が自然に発生した。その議論の中で、「サザエさん」に対し、親しみを込めた

言い方で「いいやつ」という表現がなされた。近所付き合いにおいて評判が良い印象や、交友関係の広さが「いいやつ」である理由として挙げられた。また、財布を忘れるという注意散漫な一面が指摘されたが、悪意があるわけではなく、わざと忘れたわけでないことが考慮され、そのネガティブな側面をポジティブな表現に言い換えられたことが特徴的であった。

『カツオ』は、サザエさんの弟で、やんちゃな性格がアニメで描かれている。本調査では大人に従わないことが指摘されたが、一方で「憎めない」という表現もなされた。性格は明るく、実際に接すると楽しそうだと考えられていた。要領の良さも「生きるのには上手そう」というポジティブな言葉で語られた。

「いいやつ」は、「いい子」のように模範的でないにも関わらず、近所付き合いや友人関係における他者評価はかなり高いと言える。愛嬌のある人間性が評価され、多少の失敗やいたずらをして憎めないとして結果的に許される人物である。他者から見て「いいやつ」は、要領が良く世渡り上手な人物として映ることも示された。

対人関係においては、友人関係のような同等の関係の場合に良好な人間関係を築くことができ、明るくユーモアのある性格であるため周囲から慕われ、広く交友関係を持つ人物であることが示唆された。上下関係においては「いい子」と対照的であり、従順さに欠け大人を困らせる特徴も明らかになった。

Table 2 Transcripts of 'Sazae-san' depicting the figure of a "good child"

登場人物	逐語録
浮江さん	めっちゃいいお姉さん。あの子は絶対いい子なんだろうな、「いい子」って育ってきたんだろうなっていう感じが。育ちもいいし、優等生だろうし。
早川さん・かおりちゃん	早川さんとかおりちゃんはもう、ツートップです。カツオの同級生の。
中島くん	彼、結構いい子なんじゃない？ダメだよカツオ～、とか言っていない？
マスオさん	都合がいいっていうのは、マスオ？マスオはいい子かもしれないですね～。子どもの頃はやっぱりそうだろうね。子どもの頃から反抗もしてないだろうし。お義父さんとも上手くやってるし。商社マンだし。
ワカメちゃん	ワカメちゃんとかもいい子ですよ、きつと。しっかりさん。
タラちゃん	敬語で喋るからいい子。でも、あの時代って、子どもが親に敬語使うってアリだから、今のタラちゃんだったら、そうは言わないかもしれないかなと思うけど。皆に愛されてる感じがする。

Table 3 The figure of a “good child” associated with ‘Sazae-san’

カテゴリー	コード	逐語録
他者評価	期待を裏切らない, 模範的, 品行方正	あの子は絶対いい子なんだろうな
	実力者, 成績優秀, 完璧, 模範的, 品行方正	優等生
	肩書が良い, 頭がいい, しっかりしている, 憧れの職業	商社マン
	堅実, 意志を持っている, 筋が通っている, 芯がある, 模範的, 規範意識	しっかりさん
対人関係	他者への注意, 適切な判断, 他者への声掛け, 洞察力, 規範意識	ダメだよカツオ~, とか言っていない?
	非反抗的, 逆らわない, 無害, 従順, 適応	子どもの頃から反抗もしてないだろうし。
	義理の家族との調和, 調和, 協調性, 他者を立てる, 他者を尊重する, 気配り, 良好な人間関係, 円滑なコミュニケーション	お義父さんともうまくやってるし。
個の特性	素直, ひねくれていない, 良好な養育環境, 恵まれた人, 裕福, 良い家庭, 世間知らず, マナーを守る, 常識がある, 品行方正	育ちもいいし

(3) 現実場面における「いい子像」

『「いい子」の正義感・規範意識と対人葛藤の関連』

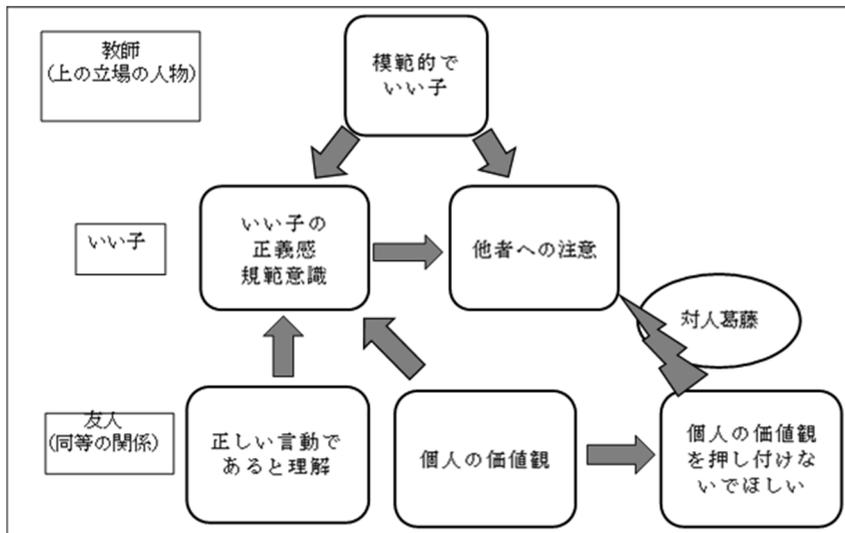
現実場面で「いい子」と関わった際の具体的なエピソードから、「いい子」の持つ正義感や規範意識が同等の立場における対人葛藤と関連することが明らかになった。(Table4)

この具体的なエピソードとして、「いい子」が正規の手順で物事を進めることにこだわり、要領良く物事を進める友人に対し正規の手順を踏むよう注意した場面が挙げられた。そして議論の最中にこの場面

の「いい子」に対し、「正義感が強い」という表現がなされた。正義感や規範意識は「いい子」における特別な特性ではなく、誰もが少なからず持っているものである。しかし、「いい子」は「こうすべきだ」という規範意識が比較的強い上、更に他者に対し規範意識を示したり、他者の行動を正そうとしたりするため、そのような行為が「正義感が強い」と表現されていると推察される。

「いい子」と接している相手は、「いい子」の正義感や規範意識に基づいた言動が正しいことであると

Table 4 Interpersonal conflict involving a “good child”



理解しながらも、その言動を個人の価値観であると捉えていた。つまり、正規の手順を踏んで物事を進める場合もそうでない場合もどちらも個人の価値観であるため、余程ルールから逸脱した行動でなければ他者から侵害されることなく自分の価値観に基づいた行動が尊重されるべきだと考えたのだ。そのため、「いい子」に注意をされると、その注意が正しいことは理解しつつも、同時に、価値観を押し付けられないで欲しいという反発心が生じ、これが対人葛藤を生じさせると示唆される。

価値観の押し付けに対する反発心や圧迫感を感じる事で、正義感や規範意識が強い人物と長時間一緒にいると疲れるというイメージが定着していた。よって、正義感や規範意識が友人等の同等の関係性においては対人葛藤をもたらすと言え、関係上の不和を生じさせる可能性が示された。

しかし、このような「いい子」の言動は他者にもルールを守るように促しているため、上の立場からは模範的な優等生と評価されることに繋がる。実際に、前述の現実場面のエピソードの語りの中で、「その子は先生から見たらいい子なんだろうな。」という表現がなされていた。このことから、同等の関係で高い評価はされない人物像であっても、教師や上司等の上の立場からの評価が高ければ「いい子」とされることが示された。

4. 考察

(1) 一般的な「いい子像」

①他者から見た「いい子」の構造

本研究では、他者から見た「いい子」の構造が明らかになった。従順で模範的な人物が「いい子」とされ、具体的な行動として他者へ注意することなども挙げられた。このことから、「いい子」の模範的行動は他者に従順であることだけでなく、「いい子」自ら規範意識に基づいた行動を取り、かつ他者に対してもルールに則した行動を取るよう指示できることも含まれると推測される。

上下関係においては、従来の「よい子」の研究でも示されてきた従順さが「いい子」と判断する上で重視された。また、他者に従うことに加え、更に上の立場の人物を立てながら良好な関係を築くことができる人物がより「いい子」として高い評価を得ていた。よって、現代の日常生活で「いい子」と評価されるためには、ただ相手に従うのではなく、上下

関係におけるコミュニケーション能力も非常に重要であると考えられる。

フォーカス・グループ・ディスカッションを用いたことにより、「いい子像」を多面的に評価する議論が生まれ、「いいやつ」という比較対象の存在が提示された。「いい子」と「いいやつ」はどちらも好印象であることが共通しているが、他者評価や対人関係において二者の相違点は多数存在する。

「いいやつ」は「いい子」に比べ、他者からの成功に対する期待値が低く、かつ失敗した場合でも「憎めない」として許しを得る点が特徴的である。大人を困らせるような行動を取り性格上の明確な欠点も周囲から指摘されるような人物であるが、一方で、友人から愛され、一緒にいて楽しいと感じさせるようなユーモアや無邪気を兼ね備えた人物でもある。「いい子」の模範的な言動が上司等の上の立場から評価されるが、しかしながら逐語録では現代社会における「いいやつ」の社会的成功を予想するような語りも存在し、時代と共に大きく移り変わる社会事情に対する適応能力は「いいやつ」の方が高いと推測された。この点については今後「いい子」の他者評価について研究する上で比較対象として更なる議論の余地があるだろう。

②「いい子」の対人葛藤に対する回避性

上下関係において、「いい子」は、上の立場の人と「上手くやる」という語りがあった。これは従順さや円滑なコミュニケーション、良好な関係性を示す言葉である。更に、波風を立てずに対人葛藤を回避し、問題を起こさないようにするといった意味も含まれているとも考えられる。これは、一般的な「いい子」に対するイメージだけでなく、実際に、現実場面での「いい子」に関するエピソードからも、対人葛藤を回避するために「いい子」が自ら妥協し、常に波風を立てないように立ち回る様子が明らかとなった。このことから、上下関係においての良好な関係の裏に、「いい子」が対人葛藤を回避していることが言える。しかし、一方で同等の関係において、対人葛藤を生じさせるなど、上下関係と同等の関係における「いい子」の振る舞い方の相違がある。今後更に詳しい分析を行い、上下関係における対人葛藤の回避と、同等の関係における対人葛藤の発生との関連を検討したい。

③「いい子」の連続性

本調査の議論では、「いい子」という評価は子どもに限らず、高校生や大学生、成人に対しても使用された。「いい子」という言葉が青年や成人に対して使われた場合、その人物の現在の言動から幼少期の様子を連想し、成育歴を含めた上で「いい子」と評価されていた。一方、子どもの場合、現時点で「いい子」と評価されていても、将来像に大きな変化や問題を起こす可能性があるとして予想された場合には、本当に「いい子」であるか繰り返し検討された。このことから、ある一時点で「いい子」であることに加え、幼少期から成人後まで連続して「いい子」であることが、その人物を「いい子」だと判断する上で重要であると言える。

従来、「いい子」であるかどうかの判断材料は従順さや模範的であること等の限られた側面であったが、現代の日常生活では、従順であるがある程度コミュニケーション能力も兼ね備え、勉強も運動も得意で多方面での活躍が期待される人物が「いい子」と表現されている。よって、「いい子像」が従来に比べ多面的かつ長期的なもの変化していると言える。このような変化の一つの要因として、「いい子」の問題行動や心の問題がメディアで取り上げられ、ある一定の時期に「いい子」であっても大きな変化が生じる場合があると社会的に認知されたことが考えられる。柏木（2008）は、一般的な子どもが突如問題を起こすことを『『よい子の反乱』ともいえる現象』と述べている。問題を起こさない穏やかな人物が「いい子」とされてきたのにも関わらず、時代の変化により「いい子」が突如問題を起こす可能性が出てきたことで、多面的かつ長期的な評価が必要となってきたと推測される。この点は、現代の「いい子像」を明らかにする上で大切な視点であり、時代の移り変わりによって「いい子像」が変化することも示唆された。

④「いい子」の正義感・規範意識と対人葛藤の関連

「いい子」とは本来、上の立場から下の立場の人物に対し使う表現である。そのため、従来の「よい子」の研究では、親子関係等の上下関係において従順である子どもが対象とされてきた。しかし、大人から見た「いい子」の友人関係や、「いい子」に対する大人からの評価と友人からの評価のずれに関しての研究は少ない。本研究では、現実場面において教

師から「いい子」と評価されている人物が、友人からは一緒にいると疲れる人物とされ、同等の関係で対人葛藤を生じさせることが示唆された。

「いい子」が正義感や規範意識に則した行動を行うことで、周囲の友人が圧迫感を感じる事が明らかになったが、この場合「いい子」に着目すると、正義感や規範意識の強さに加え、規範意識に則した行動を他者へ促すという2段階のプロセスを経ていることが分かる。このことから、「いい子」の正義感や規範意識が対人葛藤に直接作用しているのではなく、規範意識から他者に注意するという行動に移ることが対人葛藤に影響を与えていると考えられる。あくまでも本研究のエピソードは一時例であるため、正義感や規範意識の強い「いい子」であっても他者に注意しない場合や、他者への注意とは別の要因によって相手に圧迫感を感じさせている場合もあると想定される。そのため、「いい子」における対人葛藤には幾つものパターンがあると予想され、「いい子」の正義感や規範意識と対人葛藤との関連をさらに詳しく分析するためには、「いい子」自身の感情の機微を明らかにする必要があるだろう。

また、本調査の議論の中で、「いい子」の二面性や演技性を疑う語りがあり、この点も対人葛藤との関連が考えられる。同等の立場では対人葛藤が生じる一方で、上の立場からは評価されるということが、「いい子」が相手によって態度を使い分けるなどの他者への迎合を連想させる要因の一つになっていると推察された。上の立場からの評価と同等の関係における対人葛藤、そして「いい子」自身の言動と感情の動きがどのように影響し合っているのか、検討の余地がある。

5. 今後の課題

今後は「いい子」自身の感情の機微を明らかにし、「いい子」特性と精神的脆弱性との関連を検討したい。

また、本調査では時代の変化と共に「いい子像」が、従順な人物から自己実現のために努力する人物へと変化しているのではないかと指摘もされた。「色んな意味でいい子って違うような気がするからね。本当のいい子って誰なのかなってというのが分からないなと思って。」という語りが印象に残っており、現代において評価される「本当のいい子」とはどのような人物なのか更に丁寧な分析をするために、本

調査で得た考察を更に深めていく必要があるだろう。

【引用文献・参考文献】

- ・ 豊田 弘司：大学生における自我構造, 自尊感情及び随伴経験の関係 教育実践総合センター研究紀要 19. 1-5. (2010)
- ・ 朝日 志帆・岡本 吉生：親子関係に対する子どもの認知と子の精神的強さとの関連 日本女子大学大学院紀要 第24号 (2018)
- ・ 市毛 睦・大河原 美以：親のよい子願望が子どもの自尊感情に与える影響—親への依存欲求・独立欲求に注目して— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 Vol.60 149-158 (2009)
- ・ 菊池 由莉・岡本 祐子：大学生の「よい子」傾向と社会心理的発達段階の関連 広島大学心理学研究 第8号 99-106 (2008)
- ・ C.ウイリッグ：心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて— 培風館 2003年9月10日
- ・ 柏木恵子：子どもが育つ条件—家族心理学から考える 岩波新書 (2008)
- ・ 世田谷サザエさん研究会：サザエさんの秘密 新装版 データハウス 1994年12月
- ・ 磯野家の謎：「サザエさん」に隠された69の驚き 東京サザエさん学会 彩図社 2011年
- ・ 藤原 あやの・伊藤 裕子：親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の作成 カウンセリング研究 Vol.50 No.1 32-40 (2017)
- ・ 森川夏乃：青年から見た家庭内の役割と家族機能との関連—役割期待と役割行動に着目して— カウンセリング研究 Vol.49 No.3,4 (2016)
- ・ 富沢麻美：青年期における親の期待とその負担感に関する研究—大学生・専門学校生を対象に— 人間科学研究 Vol.18 修士論文要旨 (2005)
- ・ 佐久間 路子・無藤 隆：大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究 51 33-42 (2003)